

解剖学教室 生体構造科学部門

1998 年（平成 10 年）、教授の河田光博は学生部長 2 年目を迎えた。佐野豊名誉教授が京都府文化特別功労賞を受賞された。助教授の由利和也が高知医科大学（現高知大学医学部）第一解剖学教室教授に選出され、転出した。その後、小澤一史が助教授、西真弓が講師に昇進し、森田規之（ドイツハイデルベルグ大学へ留学）、楊易木、遠藤晶子の 3 名の助手の体制で教室運営がなされた。1999 年（平成 11 年）には大学院生の伊藤隆雄と、東北大学の松田賢一が助手となった。この年、基礎医学学舎の第二期工事が完了し、現在の 6 階の場所に移転がすべて終了、新たな研究環境が整備された。2000 年（平成 12 年）には第一解剖学教室の同門の山田久夫（滋賀医科大学助教授）が母校の関西医科大学第一解剖学講座の教授に、竹内義博（本学小児科講師）が滋賀医科大学小児科の教授にそれぞれ就任した。2001 年（平成 13 年）は河田光博が教室を主宰して 10 年を経過したことから、その祝賀会が解剖の同門や大学の同級生、クラブ仲間を交えて催された。また、同年以降、文部省科学研究費基盤研究（A）や科学技術庁（現文部科学省）振興調整費など高額の研究費が給付され、研究テーマの一つであるステロイドホルモン受容体の分子イメージングに関する最先端研究機器が納入された。2002 年（平成 14 年）には基礎医学学舎の標本室の大整理を行い、多大な労力を要して古い標本を新しいスチール製の棚に移し、標本を系統的に並び替えた。2003 年（平成 15 年）には広島大学から坂本浩隆が助手になった。また、大学院重点化によりナンバー講座の教室が制度上大講座化されたため、第一解剖学教室は京都府立医科大学大学院医学研究科、解剖学教室・生体構造科学部門となった。同年の夏には国際下垂体後葉ホルモン会議（WCNH）を京都国際会館で主催し、13 カ国 150 人の参加があり、盛会裏に終了した。2004 年（平成 16 年）には篤志解剖全国連合会の総会を主催した。夏には国際解剖学会議（IFAA）が京都で開催され、天皇、皇后両陛下をお迎えして、国内外から 1500 人を超える盛大な会合が持たれた。また、技師堀富栄の後任として石川剛が採用された。2005 年（平成 17 年）には助教授の小澤一史が日本医科大学解剖学教室第二講座の主任教授に就任した。これに続いて、助教授に西真弓、講師に松田賢一が昇進した。夏には日本神経内分泌学会を沖縄のプセナ、万国津梁館において日本下垂体研究会との合同大会として主催し、秋には生理学研究所から馬杉（時田）美和子が助手として着任した。また、河田光博が英国神経内分泌学会 Mortyn Jones 記念賞を日本人としては初めて受賞し、さらに冬には日本解剖学会近畿地方会を主催した。2006 年（平成 18 年）春に、佐野豊名誉教授の傘寿祝会、井端泰彦学長の退任祝賀会を開催した。2007 年（平成 19 年）夏には、組織細胞化学講習会を主催し、好評裏に終了した。

このように、生体構造科学（第一解剖学）にとっての10年間（1998-2007）は、河田光博が教授に就任した1990年（平成2年）からの創成期を経て、発展の「成熟期」であったと言える。

この10年間に教室に在籍した大学院生は、胡中庭、楊易木、陸（井上）海平、渡邊信佳、菊池典子、吉田麻希、金政秀俊、大島康史、小川弘、富樫弘一、謝蔵霞、中村望、岩田健、尾藤裕子、田中政幸、宇宿智裕、砂口眞毅、落合育雄、韓芳、中内博夫、裴敏媚、長江将輝、加来奈津子、崔洪海、吉井崇喜、プロジェクト研究員は小玉智章、長期・短期滞在した研究者は中国医科大学石玉秀教授、オックスフォード大学 John Morris 教授、マーストリヒト（オランダ）大学学生 Joy Lion、秘書は山本真喜子（在籍7年）、吉川晶子（在籍1年）、西田涼子（在籍5年）であった。

現在教室は、5名のスタッフのほかに、大学院生として北川朋子、梶川佳照、吉田敦彦、細川康二、澤村和秀、森浩子、高浪景子、栗原ゆか、森崎慎一、プロジェクト研究員として藤川和世、博士研究員として平原（和田）幸恵、研究生として糸瀬稔、李美花、秘書として荒島智子で構成されている。



生体構造科学関係者の忘年会の一コマ（平成17年12月）

解剖学教室 生体機能形態科学部門

1998年から2007年の10年間における第2解剖学教室は、2点において大きく変貌いたしました。第1に教室主任が交代したことがあります。1975年より第二解剖学教室を主宰してこられた井端泰彦教授が、2000年4月から学長に就任し、同年9月に25年間に及ぶ教授職を勇退し学長職専任となりました。2003年には学長に再任され、2006年まで2期6年間の学長職を勤められました。2002年8月より、勇退された井端教授の後任として、横山尚彦が第2解剖学教室教授として着任し、現在に至っております。第2に、2003年の第一および第二解剖学教室から解剖学教室への統一と大学院重点化に伴い、第二解剖学教室の名称が無くなり、大学院医学研究科生体機能形態科学（医学部解剖学教室 生体機能形態科学部門）と変わったことであります。

井端教授は、国立京都国際会館にて1999年12月に『日本組織細胞化学会 第40回記念総会・学術集会』が、同会館にて2000年6月に『第73回 日本内分泌学会学術総会』を会長として指揮を執られました。2001年2月には教授退任を記念して、本学図書館ホールにて神経科学講演会を開催しました。演者は中西重忠（京大教授）、岡村均（神戸大教授）、藤澤肇（名古屋大教授）、廣川信隆（東大教授）といった神経科学をリードする方々でした。また、同時に井端泰彦教授退任記念業績集が刊行されました。

研究に関しては、第二解剖学教室は主に視床下部にあるストレス応答の中核・室傍核と生物時計の中核視交叉上核などを対象とした、血中浸透圧の変化や光刺激への応答を可視化、定量化する研究を田中雅樹助教授が指導し、神経核における神経膠細胞の発達の解析を玉田善堂講師が指導しました。その他、虚血再灌流による神経変性を低体温療法を用いて抑止する実験（松田知之助手）、炎症性疼痛におけるカプサイシン受容体の関与（天谷文昌）、末梢神経変性による慢性疼痛の機序（松本裕則）、消化器の炎症におけるステロイドホルモンの中核へのネガティブフィードバック（児島謙作）など、組織化学を駆使して多岐にわたる成果を挙げました。

井端教授の教授退任と前後して、玉田善堂は母校の大阪歯科大学大学院准教授、林誠司は京都府保健福祉部医務主幹として移動いたしました。入れ替わりに鳴瀬善久、大橋健太郎が着任し、生物時計の分子機構へと解析の手を広げていきました。一方1998年より、武田薬品工業株式会社との共同研究を開始しました。同社がリガンドの明らかでないオーファンリセプターの解析から見出した新ペプチドProlactin Releasing peptide (PrRP), RFamide relating peptide (RFRP)に関して、組織学的な解析を担い、脳内におけるこれらペプチドの機能を明らかにしてきました。2002年に飯島典生助手がPrRPの視床下部における機能に関する論文で、本学青蓮賞を受賞しました。また2002年、日本神経内分泌学会において当該分野への貢献を評価され、第18回川上賞

を田中雅樹が受賞しました。1998年から現在までに、本教室で研究を行い、博士号を取得した先生は12名に及びます。2006年に学長退任式典が開催され、学長退任記念号が発行されました。

横山が着任してからの研究は、井端前教授のテーマと大きく変わり、発生生物学を中心としたものへと変化しました。第二解剖学教室は、井端前教授の元で藤沢肇（前名古屋大学教授）、仲村春和（東北大学教授）、渡辺憲二（姫路工業大学教授）、その前の山田博元教授の時代には安田峰生（前広島大学教授）といった方々が発生学研究を行っており、発生学は第二解剖学教室にとって伝統がある研究課題であります。横山の研究は、マウスの発生遺伝学を中心としたものであり、マウス変異体よりその原因遺伝子を同定し、形態形成機構を探るという研究アプローチを用いております。横山は、体の左右が逆転する（内臓逆位）マウス *inv* 変異体を発見し、さらに、その原因遺伝子を同定しておりました。*Inv* 遺伝子産物は絨毛に局在していることはわかっていますが、その機能は判然としておりません。絨毛は、古くより知られている細胞小器官であります。近年、絨毛が体の左右決定や、他のさまざまな形態形成維持機構に関与していることが知られるようになってきております。しかしながら、その機構はほとんど未解明であり、大きな研究分野となりつつあります。

人事では、杉山紀之、芝大が助手として鳴瀬・大橋助手の後任として2004年に着任し、*inv* 遺伝子の機能解明に取り組んでおります。整形外科より奥村弥、小児内科より奥村保子夫妻が大学院生として研究に従事しています。2006年に田中助教授が本学老化研細胞生物学部門へ移動し、後任として武内恒生講師が着任して来ました。飯島学内講師はメダカ変異体のスクリーニングにより心臓の発生異常のある変異体を見出し、その原因遺伝子同定に成功いたしました。また、プロジェクト研究員として紙子沙弥香が2005年よりメダカプロジェクトに参加しております。2007年10月に日本医科大学解剖学教室准教授として転出予定であり、後任として小林大介が着任予定であります。解剖学教室の技官として楠原一男、堀富榮技師が勤めていましたが、堀技師の定年退官により2004年から石川剛技師が勤務をしています。

教育では、従来、2学年2学期より行われていた解剖学の講義・実習が、2005年より2学年1学期から開始されるようになりました。また、井端学長が第二解剖学教室へ着任以来、神経科学を第一解剖学教室と交互に分担していましたが、横山が着任してから、2005年より発生生物学・骨学実習は生体機能形態科学が、神経科学・脳実習は生体構造科学の担当となりました。また、2007年9月に解剖学教室として府民講座を開催し、開かれた大学を目指して活動を開始いたしました。

生理学教室 生体機能制御学部門

変遷（1998 年～2007 年）

2003 年度（平成 15 年度）より、第一生理学教室は第二生理学教室と共に大講座である生理学教室の一員となり、旧第一生理学教室は生理学教室生体機能制御学部門となった。一方、同年度、大学院重点化が行われ、生体機能制御学（2007 年度より大学院名称は細胞生理学に変更）として発足した。1999 年 3 月に森本武利教授が停年退職し、神戸女子短期大学長に就任した（2001 年、神戸女子大学学長も併任）。森本武利は、体内水分代謝および体温調節機構の解明において多大な貢献をし、第一生理学教室の発展に寄与した。2000 年 2 月よりトロント大学准教授丸中良典が教授に着任した。2002 年 3 月鷹股亮講師（学内）が奈良女子大学（助教授）へ転出し、2003 年 3 月伊藤俊之助教授が、日本赤十字京都血液センター（副所長）へ転出した。2004 年 3 月瀬尾芳輝講師が、獨協医科大学医学部生理学教室（教授）へ転出した。現在、教授・丸中良典、准教授・新里直美（2000.9 トロント大学より着任）、講師（学内）・宮崎裕明（2002.11 東京大学より着任）、助教・中島謙一（2004.10 東京薬科大学より着任）、助教・徳田深作（2006.4 着任：2004.4 本学卒）、プロジェクト研究員・山田敏樹（2007.4 富山大学より着任）、大学院生・杉野春日子（2004.4 入学）、大学院生・樽野陽幸（2007.4 入学：2007.3 本学卒）が在籍している。

教授・丸中良典は、本学卒業後一貫して各種臓器・組織・細胞におけるイオン輸送の制御機構解明の研究に従事して来た。特に 14 年間の米国テキサス大学ガルベントンおよびエモリー大学・カナダトロント大学／小児病院研究所在籍中に、腎臓尿管および肺呼吸上皮におけるナトリウム・クロライドイオン輸送の制御機構と生理的意義解明の研究を進めていた。本学教授に着任後も、一貫してイオン輸送制御機構解明の研究を推進し、食塩感受性高血圧症発症メカニズム解明に関する研究を進めており、アルドステロンによる体液制御機構の破綻に起因する食塩感受性高血圧症発症メカニズムの解明に新たな道筋を付けた。特に、細胞内クロライドイオンが、各種酵素活性制御を行い、また種々の遺伝子発現制御も行うことを見出し、クロライドイオンがアルドステロンを含めたホルモンの細胞内セカンドメッセンジャーとして働くことを発見し、数々の国際学術雑誌に発表した。これらの研究は、准教授・新里直美を中心として進められており、講師・宮崎裕明、大学院生・青井渉、大学院生・塩崎敦（現トロント大学／トロント総合病院外科学教室リサーチフェロー）も本研究の推進に尽力している。新里直美准教授は、樽野陽幸（院生）とともに、体液浸透圧変化感受機構解明の研究も進めており、特に細胞内クロライドイオン濃度とチロシンキナーゼが細胞外浸透圧感受に重要な役割を果たしていることを解明し、すでに多数の研究業績を国際学術雑誌に発表している。宮崎講師が中心となり、新たな研究の展開として、癌細胞増殖におけるクロライドイオンの役割も解明し、一方、中島謙一助教を中心と

して、クロライドイオンが細胞骨格伸長を促すことにより神経突起伸長を促すことを見だし、これらの研究業績は国際学術雑誌に発表済である。さらに、助教・徳田深作を中心として、上皮組織細胞間隙イオン透過性制御機構の解明を目指し精力的に研究を進め、研究成果を国際学術雑誌に論文発表を行っている。

上記の研究には、他の教室の大学院生も参画している。内科学教室内分泌・免疫内科学部門から、西村智子（旧姓：植田）がインスリンの腎尿細管におけるナトリウム輸送制御機構チロシキナーゼの役割解明に関する研究に参画し、学位を取得した（新里准教授・丸中教授の指導による）。小児科学教室からは、藤本慎一郎がアルドステロンの腎尿細管におけるナトリウム輸送制御に係わるフラボノイドによる調節機構解明に係わる研究に参画し、学位を取得した（新里准教授・丸中教授の指導による）。さらに、小児科学教室の大神文は、グリア細胞における尿素輸送を介しての水の能動輸送を発見した（宮崎講師・新里准教授・丸中教授の指導による）。さらに、小児科学教室からは、徳田幸子が呼吸 II 型上皮細胞内 pH 調節機構の解明に関する研究に参画し、アンモニア依存性細胞内 pH 制御機構を見だし、学位申請中である（新里准教授・丸中教授の指導による）。耳鼻咽喉科学教室の安田誠がヒト鼻腔粘膜・副鼻腔粘膜上皮細胞における cAMP および Ca^{2+} によるクロライドイオン分泌機構を解明し、学位を取得した（新里准教授・宮崎講師・丸中教授の指導による）。同じく、耳鼻咽喉科学教室の浅野純志が、ヒト気道粘膜下細胞におけるクロライド分泌制御におけるフラボノイドによる制御機構を解明し、現在論文執筆中である（新里准教授・丸中教授の指導による）。内科学教室呼吸器内科学部門の長谷川功がヒト気道粘膜下細胞におけるクロライド分泌制御におけるナトリウムイオンおよび重炭酸イオンの役割を解明し、学位を取得した（新里准教授・丸中教授の指導による）。整形外科学教室の牧昌弘が骨芽細胞増殖における細胞内クロライドイオンによる制御機構を解明し、学位申請中である（宮崎講師・中島助教・新里准教授・丸中教授の指導による）。呼吸器内科学の竹村佳純（現米国・エモリー大学医学部生理学教室リサーチアソシエイト）が気管支上皮細胞繊毛運動の解明を目指し、大学院生の河野健二・駒谷陽代とともに研究に参画し、細胞内イオン環境制御による繊毛運動調節機構を明らかにした（新里准教授・丸中教授の指導による）。現在、外科学教室消化器外科部門の大学院生・大澤るみが胃癌細胞増殖に係わるイオンチャネル・輸送体の研究に、泌尿器科学教室の平岡健児がホルモン感受性・非感受性前立腺癌における癌細胞増殖メカニズム解明に係わる研究にそれぞれ従事している。さらに、内科学教室呼吸器内科学部門の山田崇央（院生）が呼吸器上皮イオン輸送制御機構解明のため、細木誠之助教が癌細胞増殖における種々のイオン輸送体の役割解明のため、研究に従事している。また、鮫島京子が教室秘書として、種々の煩雑かつ複雑な教室事務を処理し、教室における教育・研究の円滑な推進を支えている。

生理学教室 神経生理学部門

第二生理学教室の第三代教授である外山敬介先生は、昭和 56 年から平成 11 年 3 月に定年退官されるまでの 19 年にわたって多岐にわたる神経科学研究を推進し、高い成果を挙げられた。具体的には、大脳皮質視覚野のシナプス可塑性と学習過程を *in vitro* で電気生理学的に詳しく調べた研究（小松由紀夫、外山）、高次視覚野の神経細胞による 3 次元運動刺激に対する応答特性を調べた研究（外山、北大路浩史、梅谷一清、飼原壽夫）、さらに、視床（外側膝状体）から大脳皮質視覚野への神経回路形成を *In vitro* 共培養標本で調べた研究で大きな成果を得た（山本亘彦、黒谷亨、東秀二、外山）。特に、山本講師らによって、視覚野の深層から浅層に向かって伸びる発達期の外側膝状体の神経細胞の軸索が第 IV 層で一旦ストップして、その後軸索を層に沿って水平に伸ばすことを明らかにした研究は *Science* 誌に掲載され、この分野の研究の次の発展に大きく寄与した。

その後、平成 12 年 5 月に後任の教授として大阪大学健康体育部から木村實が着任した。同時に、大阪大学で木村の研究室で研究を共にしてきた松本直幸が学内講師として着任した。教室は、外山前教授の研究室で研究を行ってきた黒谷亨講師、東秀二助手（平成 12 年講師に昇任）、井之川仁助手を加えて 5 名のスタッフとなった。学生教育については、丸中良典教授が主宰する第一生理学教室と共に生理学を担当することになった。第二生理学では脳・神経系を中心とする生理学の講義と実習、演習の授業を行った。木村は医学部の出身ではないが、大学院（東京大）と修了後すぐに就職し、助手、講師、助教授時代を過ごした自治医科大学の生理学教室で合計 18 年間にわたって生理学教育に携わった経験に基づいて、本学での教育にも最初から情熱を持って臨むことができた。ただし、30 年間の科学研究の著しい進歩と共に学生教育も大きく変わった。東大医学部一号館の地下にある古びた実習室で、故時実利彦脳研教授直伝というネコの除脳固縮の実習（2 回に 1 回程度しか成功しない）をお手伝いしながら、現象の奥にあるしくみを、学生と共に筋道を立てて理解した時代を思い出す。現在では、脳の実習は高性能のパソコンで 3 次元図形をディスプレイに提示し、液晶シャッター付きのゴーグルで観察して、両眼視差と奥行き知覚との関係を定量的に調べている。しかし、機器や手法が大きく変わっても、個々の生命現象についての構造・形態、分子の動態や生体全体のはたらきにおける役割に関する多くの知識を基に、生命現象の全体像を把握する力、物事を論理的に考える力を養うという本質は全く変わらないことは勿論である。

木村は、大学院時代に外山前教授の指導によって大脳視覚野の研究を始め、学位論文もネコの一次視覚野のニューロンのフリッカー応答の研究であったが、恩師とは違う研究を行うことを考えて大脳基底核を中心とする運動機能や情動機能に関わる研究をその後 20 年にわたって行ってきた。平成 12 年に着任後、サルを実験動物として用いる神経生理学研究をスタートし、研究室

スタッフと大学院学生（上田康雅、佐藤武正、南本敬史、中井定、山田洋、堀由紀子、榎本一紀、高安奈津子、村西学、山中航、松本純）、ポスドク（南本敬史、山田洋）、そして研究補助員（坂根涼子、原田春美）皆さんの一丸となった努力と研究をエンジョイする活動によって、この間に幾つかの高い成果を挙げる事ができた。具体的には、大脳基底核線条体、中脳ドーパミンニューロン、視床 CM/PF 核ニューロンの運動・認知機能に関する神経生理学研究をおこなった。とりわけ、視床髄版内核である CM/PF 核が、最も望ましい選択肢ではなく次善の策の選択に関わることを示した研究（Science、南本、堀、木村、2005. 6）、線条体のニューロンが放電頻度によって手持ちの選択肢の望ましさを表現して行動のゴールに向かう意志決定や行動選択に必須の役割を担うことを明らかにした研究（Science、鮫島、上田、銅谷、木村、2005. 11）は、この分野の研究の進歩に少なからず貢献することができた。

この間に、黒谷亨講師が名古屋大学環境医学研究所の小松由紀夫教授の研究室に転出し、東秀二助手が講師に昇任した（平成 12 年）。また、木村の研究室で学位を取得した上田康雅が助手に就任した（平成 12 年）。佐藤武正は鳥取大学医学部神経生物学教室（畠義郎教授）に助手として転出し（平成 14 年）、南本敬史は米国 NIH に留学した（平成 16 年～）。平成 15 年には、大学院重点化に伴って、教室名が「第二生理学」から「神経生理学」に変更された。なお、木村は平成 13 年に日本神経科学学会「時実利彦記念賞」を受賞し、また本学と京都大学の神経科学に関係する研究室の多大な尽力を得て、第 29 回日本神経科学大会（平成 18 年）の大会長を務め、1,500 演題、3,000 名の参加者（外国から 150 名）の大会を盛会に導いた。



木村 實

分子医科学教室 分子生化学部門

1998～2007年の10年間における教室の変遷の中で、最大の出来事はなんと言っても分子生化学部門とゲノム医科学部門の2部門からなる分子医科学教室という大講座となったことである。2つ目の部門を新設することは教室にとって長い間の課題であったが、ようやくこの念願が達成されたのである。今後の発展のための基盤が整ったわけであり、まことに記念すべき出来事であった。新設に当たっては大学全体から暖かいご支援をいただいた。あらためて深く感謝するしだいである。

なお、本学の大学院重点化による組織改変と、2部門からなる大講座となる過程がほぼ同時に進行したので混乱が生じることも無く、幸運であった。

さて、分子生化学部門が現在の基礎学舎6階に落ち着くまでに続けて2回の引越しが必要であったのはかなりハードであった。

教室員の構成はこの10年間で大きく変化しており、前講師西村洋が同位元素室へ、また前講師(学内)野坂和人が化学教室へ移籍後、助手として小野塚真理(後に同位元素室へ移籍)、増田光治(後にプロジェクト研究員となる)がスタッフに加わった。現在は講師若林保良および里見佳子、助手徳田春邦、プロジェクト研究員増田光治がスタッフとして在籍している。その他、臨床系教室から来て分子生化学部門で研究を続けている大学院生や、他大学や企業から来ている研修員、また薬学系の他大学から見学にきている学部学生など多彩な顔ぶれで研究が進められている。

なお、前教授西野輔翼は、2007年3月に退職し、4月から立命館大学へ移籍したが、京都府立医科大学の特任教授として引き続き兼務在籍し、がん征圧センターがん予防コンサルタントとしての業務、ならびに臨床介入試験研究に携わっている。現在、西野の後任の教授選考が進められているところであり、教授不在となっているため当面の部門管理はゲノム医科学部門教授田代敬が行っている。

研究においては、多くの分野で着実に成果をあげており、以下に代表的なものを紹介する。

まず、がん予防の研究分野においては、基礎から臨床に至るまで幅広くカバーして成果をあげてきた。基礎研究では、がん予防に有用な化合物をスクリーニングし、有望な候補物質であると判定された場合には、その効力を動物実験で確認することになる。西野、徳田を中心としてこのような基礎研究が広い範囲にわたって進められ、カロテノイド(たとえば、 α -カロテン、リコピン、 β -クリプトキサンチンなど)、フラボノイド(たとえば、ルテオリン、ノビレチンなど)、テルペノイド(グリチルリチンなど)をはじめとする多彩な植物性成分、またラクトフェリンな

どの動物性成分が有望であることを見出した。一方、里見、増田を中心に作用機序の解析が進められ、種々の遺伝子群の発現を調節することによってがん予防効果を示す可能性があることを明らかにするとともに、種々のフリーラジカルによる遺伝子の損傷によってがん化が進展することを確認するための研究において成果をあげた。また、バイオ・ケモプリベンションという新しいがん予防戦略を進めるための研究の一環として、里見が中心となって、がん予防効果が期待できるフィトエン（天然カロテノイドの一種）を産生できるように遺伝子操作したマウスを作成することにも成功した。さらに、これらの基礎的研究の結果に基づいて、西野を中心に臨床介入試験が開始され、現在進行中である。すなわち、C型肝炎ウイルス性肝硬変患者に高い頻度で発生する肝がん予防、および大腸がんの前がん病変と考えられている大腸ポリープの進行を予防するための臨床介入試験を進めている。肝がん予防に関しては、複合カロテノイド（一日量としてリコピン10 mg、 β -カロテン6 mg、 α -カロテン3 mg、フィトエンなどその他のカロテノイド1 mg）の投与により有意の抑制効果が見られることを証明することができた。同様の臨床介入試験をモンゴルで実施することになり、現在その準備を進めているところである。また、この複合カロテノイドに加えて、 β -クリプトキサンチンおよびイノシトールを強化した温州ミカンジュース、あるいはラクトフェリンを併用することによって肝がん予防効果が増強されることも明らかになってきており、その結論を出す事が当面の優先課題となっている。

なお、がん予防物質として研究してきたラクトフェリンが、最近になって内臓脂肪を減少させる効果も示すことを見出し、新たな重点課題として取り組んでいるところである。

若林はアルギニン、プロリンがグルタミン酸から合成される際に必要な酵素ピロリン-5-カルボン酸合成酵素の活性が小腸に限られることを見出し、小腸が大量に切除された場合、通常では非必須アミノ酸であるアルギニンが必須アミノ酸になってしまうことを動物実験によって明らかにしてきた。そして国内外の研究者との共同研究を進め、このことがヒトでもあてはまることを臨床的に証明した。

教室における伝統的なビタミンB1研究も着実に進展し、現在は化学教室へ移籍した野坂、および同位元素室へ移籍した小野塚が中心になってヒトにおける関連遺伝子解析も含めて研究が継続されている。

以上の研究以外にも多彩な分野で成果が蓄積されており、今後の展開が期待される。これらの研究成果は、多くの本学基礎および臨床系教室や国内外の他大学や研究所および企業の研究グループとの共同研究によって達成されたものである。共同研究が今後も進展することは確実であり、充実した研究ネットワークが整ってきたことは、教室の発展に役立つ大きな資産である。

西野輔翼

分子医科学教室 ゲノム医科学部門

分子医科学教室・ゲノム医科学部門は、2004年4月1日に田代の着任と同時に発足した新しい部門で、大教室でペアを組む分子生化学部門と生化学・分子生物学を半分ずつ分担しています。現在、池川雅哉准教授、中野正和助教、八木知人助教、大見奈津江プロジェクト研究員、田中雅深プロジェクト研究員、谷口孝純研究員、技術員1名、大学院生3名、研修員2名、学部学生2名、情報管理者1名が活躍中です。当部門には10年の歴史がございませんので、ここではゲノム医科学に課せられたと認識している使命と夢を書かせていただきます。

ゲノム医科学部門の目標は、1. 分子を軸に生命とヒトを捉える学問を教育と研究の両面で実践すること。2. ゲノム医学というなお未熟な学問の創出に参加してその実学的部分を府民に還元すること。の2つです。

1. 分子を軸に生命とヒトを捉える学問：

分子を軸に生命とヒトを捉えることは、今日、医学部のすべての部門で実行されている常識であり、自分もやっていて誰でもできることなのに何を今更という感想を抱かれる先生方もおられることと存じます。皆様が利用している生化学・分子生物学だからこそ、学部教育では、学問の体系と根本的考え方を語ることを心がけています。研究では、手法として生化学・分子生物学を用いるレベルにとどまらず、分子の存在や物性や機能について、新規に発見・命名して解析するプロでまずありたい、その上で「効く、効かないの医学実験」を行いたいと願っています。どなたかが見つけた分子と医学との関わりを調べるのみならず、未知なる分子の新発見と記載をして、高いレベルの分子の取り扱い技術を養った上で医学との関わりの果実を採りにいくことを心がけています。大学単位で知財管理をすることが常識となりつつある昨今、医学との関わりを調べるべき分子の学問を自力で創出すること抜きには、医学知識の食物連鎖の中では狩られる側に立ってしまう厳しい現実から目をそむけずに頑張り抜く文化を育みたいと、少なくとも夢見ています。正面からタンパク質の生化学と向き合うことがプロテオミクスやバイオインフォマティクスへの対応の基本姿勢です。SNPや発現量解析の超大量のデータから有用な情報を抽出するバイオインフォマティクス技術を学内の先生方と共有すべく研究開発センター活動を実践しています。

2. ゲノム医学：

発足当時はゲノムという学問自体が未熟で、それとどのように関わっていくか不鮮明な面もありましたが、この3年間、部門のメンバーや学内外の共同研究者の先生方と一緒に、法律と倫理を遵守して静かで地道な努力をして、ゲノムについてのビジョンが鮮明になり、今は当分野が何をすべきかが次第に明確になりつつあります。疾患原因・制御 SNP (1塩基多型) の同定とその応用としてのゲノム診断の分野で日本は欧米に遅れをとっており、努力して欧米並みのレベ

ルを確保したら自然に国内トップクラスか、もしかしたらトップになってしまう状況です。近年の全塩基配列決定国際プロジェクト完成の真の価値は、遺伝的個体差の実体を具体的塩基配列で記載してさらにそれを利用して臨床医学に応用することまでを可能たらしめたことです。昔は、疾患の発症や進行スピードの個人差のうち生活習慣の影響を受けない部分を「運」だと言っていました。それを近代医学は「遺伝的個体差」だと見破って来たのですが、その遺伝的個体差の実体を具体的塩基配列の個体差で記載することが可能になったのは全塩基配列決定とその後の夥しい数のゲノム位置マーカー（主に SNP）の同定のおかげです。この 2 年間に、各疾患について発症と進行制御のマーカー SNPs が次々と同定され、あと 5 年程度で主要部分の同定競争が終了して、次の段階としてゲノム診断と個人最適化医療が実現されることが確実な状況になりました。ところが、日本はこの肝心なところで欧米に水をあけられており、主要 60 疾患の診断 SNP 同定競争で完敗して、ゲノム診断技術の純輸入国（巨大なターミナルユーザーの群れ）に転落することが危惧されます。現在、当部門では、学内共同研究者の先生方と、そうならないための出来る限りの努力をしています。どうか温かい目でお見守りいただき、ご指導をお願い申し上げます。

疾患の発症・進行制御、体格、体質、知能、記憶力、ギャンブル好きの程度、食べ物や音楽や異性の嗜好、信心深さなど、客観性がある再現可能な診断ないしはアンケート調査が可能な個性の項目について、ゲノム寄与（先天）と環境寄与（後天）の影響の比率が 1970 年代から一卵性・多卵生双生児の比較追跡研究等で次々と解明されました。ごくおおざっぱに言うと、半々の寄与です。様々な個性の約半分を形作る遺伝的個体差がゲノムのどの部分の塩基配列（欠失と挿入とコピー数変化も含めて）によるのかを、それぞれ迅速に同定できるようになりました。一部の項目は日本や欧米主要国では倫理への配慮で手つかずのままになるかもしれませんが、中国やインドなどが今の先進諸国の生命倫理に対してどのような態度をとるかによっては予想以上に広範囲の個性の遺伝子の解明が行われる可能性もあります。もちろん、倫理的に問題がある事項を当部門が研究することは絶対にありませんが、冒険的な国で一旦同定されてしまえば否応無く日本にも流入すると見込まれる知能など文系的側面も含めた個性の遺伝子に関する知識への冷静で安全な対応を立案する必要があることを覚悟しています。一方、バルト 3 国やアイスランドなどでは、国策として国民のゲノム情報と臨床情報を収集して、国民の健康を守るために利用するのみならず知的情報資源として産業利用することが始まりました。日本でも、倫理やプライバシーに万全の配慮をした上で、健康と長寿のためにゲノム情報を穩健に利用する方策を見識のある行政と検討するべき時期が近づいています。京都府ゲノムコホートの組織化や臨床データと臨床標本の散逸を防ぐ仕組み作りなどが必要だと考えられます。学内外の皆様にご指導いただくことを楽しみにしています。それを支える堅実な学問技術と人材が育ちつつあり、今後さらに若い医師、看護師、研究者、学生諸君の参加を期待しています。

田代 啓

病理学教室

2003年4月からの大学院再編（重点化）とあわせて病理学関係3教室および1部門は大講座化することとなった。これは2001年から本学あり方検討委員会において「教養教育・基礎・社会医学系教室のあり方」について検討され得られた結論、すなわち、病理学関係教室を大講座化して、その中に3部門を置き、3教授がそれぞれの部門を担当するというものに則っている。このような再編は、医療の質を高めるうえで病理医が果たす役割が増大し、病理専門医の育成や卒後臨床研修に大学の病理学教室がより一層大きく貢献することが求められる時代になったことを反映している。

「病理学教室は一つ」という基本的コンセプトに基づき、病理学教室内に置かれた3部門は一つになって教育・研究・診療を担うとともに、担当する分野はそれぞれの専門性を生かすことによってトップレベルの教育・研究・診療を行う（右図）。そのことを円滑に進めるために、病理学教室内の意思疎通を図るべく、病理学教室3教授からなる教授会議を毎月定期的に開催している。

次に病理学教室に関連する個々の事項について具体的に述べる。

学部教育について

病理学教室の本学における役割は教育・研究・診療を3本柱としていくことであり、とりわけ学部教育は大学にとっても病理学教室にとっても根幹をなすものとする。

現時点（2007年9月）において、病理学教室が担当している教科は以下のとおりである。

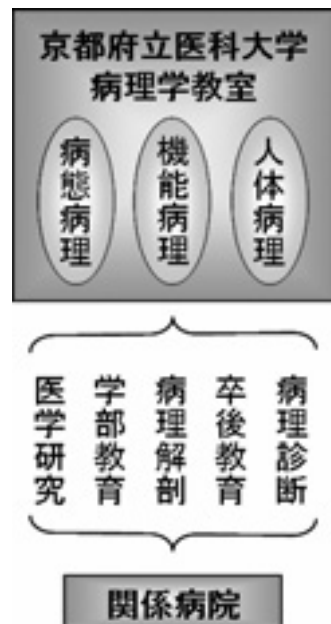
3 学年：基礎病理学（必修）10.5 単位、機能病理学と病態病理学が担当

4 学年：研究配属（必修）4.5 単位の一部、機能病理学と病態病理学が担当

5 学年：臨床病理セミナー（選択）1 単位、全ての病理学部門が担当

5-6 学年：臨床実習（必修）37.5 単位の一部、診断病理学が担当

このように、基礎病理学と研究配属は機能病理学と病態病理学、臨床実習は診断病理学部門、臨床病理セミナーに関しては全部門が各々の専門性を生かして担当している。また、基礎病理学に関しては機能病理学と病態病理学が単位認定を行うが、診断病理学部門も専門性を生かして数コマの講義を担当する。



病理学大講座化に伴う大学院生の教育研究指導について

計量診断病理学（2007年4月より、人体病理学と改称）、細胞分子機能病理学、分子病態病理学という3つの部門における大学院生の教育・研究指導を、病理学大講座としてどのように進めるかに関しては、以下のように考える。

それぞれの部門に属する大学院生の中で、将来にわたり病理学の教育・研究に携わることを希望する者は、当該部門における教育・研究指導を受けることを主とするものの、数ヶ月ないし半年間の当該部門以外での教育・研究指導をも受けることができるように配慮する。つまり、各部門が有する特徴ある研究方法論や研究に対するアプローチを、一定期間ではあるが学ぶことができるよう、部門ごとのセミナー等、研究発表の機会への参加を可能にする。

しかしながら大学院生として病理学教室に出入りする者の中には、将来、病理学の専門家にはならず、臨床医学のフィールドで活躍する者も多い。そのような立場の大学院生にあっても、病理学大講座の中で大学院生活をすこすメリットが享受できるよう、本人の希望を十分に勘案しつつ、主として教育・研究指導を受ける部門に加えて、当該部門以外での教育・研究指導を受けることができる機会を一定期間配慮することが望ましいと考えている。このことにより、彼らが将来、臨床医や臨床医学研究者となっても、病理学に対する正確な理解・認識に基づいた適切な対応を期待できるにちがいない。

以上、病理学大講座の各部門の壁を越えた教育・研究指導システムの恩恵に大学院生を浴させるために最大限の配慮をすることにしたい。

病理診断医の育成

病理診断医育成の基本方針は、ただ単に病理専門医試験に合格することを目標とするのではなく、それを上回る高度の知識と技量および深い洞察力を有する実際に役立つ病理専門医を養成することにある。そのためにまず重要なことは数多くの標本を観察することであり、それとともに、自らの診断を検証できる環境作りが欠かせない。

実際、臨床から病理診断に要請される内容は高度化しそれに的確に応えるためには臨床各分野（各臓器）に精通した専門の病理医が必要である。一病理部門ですべての臓器に対応することは不可能であり、現存の3病理部門が協力する必要がある。現在3部門いずれも得意とする臓器は異なっており、互いに協力し合うことにより密度の濃い病理診断が可能である。このように専門性を発揮できる環境を作ることは、病理部全体の各臓器における診断能力の向上を可能にするとともに、各臓器に広く精通した病理診断能力を有する病理医の育成に貢献し得ると期待される。

病理解剖への取り組みについて

病理解剖は、日本では近年減少傾向にあるが、2004年4月から実施された新たな医師臨床研修制度のもとで、CPC症例の提示とレポート作成が必修とされ、医師の卒後研修の中で病理解剖が

明確な意義をもつことが確認されるに至った。先進的医療が展開される中で、病理解剖の意義はますます大きくなっていると思われる。

さて、本学では、三つの部門が以下のように、曜日を決めて病理解剖を担当している。

月曜日：計量診断病理学部門（2007年4月より、人体病理学部門に名称変更）

火曜日、木曜日：細胞分子機能病理学部門

水曜日、金曜日：分子病態病理学部門

なお、土曜日、日曜日、国民の祝日に関しては、病理解剖資格を有する病理医が総出で、順番に担当している。連休が続く場合には、解剖受付をしない日が二日間連続することのないように配慮して当番を決めている。

2004年5月から、病院病理部で一括して時間内の病理解剖受付をするシステムが稼働し始めた。

病理解剖の意義は、臨床へフィードバックされてこそ完遂される。そのために各部門では、担当していた臨床医を加えた剖検検討会を症例ごとに定期的に開催している。一方、疾患自体や病態に教育的意義が大きい症例に関しては、部門を越えた、全学的CPCを、臨床の主要な科のスタッフを加えて、研修医に対する教育を主たる目的として年2回開催している。

なお、以前より病理解剖に際して、臓器・組織の診断・研究・教育への全学的な活用が望まれてきたが、倫理的な配慮のもと書面による遺族の同意を得る新しいシステムを病理学教室から提案し、本学医学倫理審査委員会の承認を得て2004年4月から稼働した。

新臨床研修制度への対応

2004年度から新臨床研修制度が導入されCPCレポートの作成が必修となった。このため、病理学教室では教室全体でこれに対応することを決め、本学における制度の確立と指導方法およびCPCレポートマニュアルの作成を行った。また、定期的にCPCを開催し研修医を指導する必要から以下のものを実施している。

- ① 各部門における教育CPCの定期的（毎週1回）な開催
- ② 全学教育CPCの開催（「病理解剖への取り組みについて」の項で既述）

関係病院について

関係病院には、すでに病理医がいる病院と、病理医がいないが病理医を必要としている病院の二つがある。病理医がすでにいる病院に関してもその大部分は一人ないしは二人病理医であり、臨床が要求している病理診断に対応できる人数ではない。そこで大学の病理部として果すべき役割は、臨床が要求する病理診断に関する最新の知識を病院勤務の病理医に伝達すること、さらに病理診断に迷う症例の診断を気軽に相談でき、また、自由にディスカッションできる場を提供することである。大学病理部は勤務病理医に対し常に開かれた場として、新しい知識が得られ、また気軽に診断を相談できる信頼できる場である必要がある。現在関連病院に赴任している病理医は

以下の 17 名である。眞崎 武 府立与謝の海病院；建部 敦 明石市立市民病院；細川洋平 近江八幡市立総合医療センター；岸本光夫・益沢尚子 津市民病院；浦田洋二・山野 剛 京都市立病院；加藤元一・榎 泰之 京都第一日赤；桂 泰・永田昭博 京都第二日赤；三宅敏彦 神戸中央病院；南川哲寛 第二岡本総合病院；川端健二・横山慶一 松下記念病院；小山田ゆみ子 明治鍼灸大学付属病院；安井寛 洛和会音羽病院。

病理医が不在の関連病院には教室員の定期的な派遣が必要である。正しい病理診断をする上で、病理医と臨床医の間には単なる書面上のみではない、良好な意思疎通が求められる

まとめ

病理学関係教室が一つになり大講座化した経緯・現状および病理学教室が今後なすべき事項について我々の思いを述べてきた。今、全国の多くの医学部病理学教室で再編が進められているが、流れは大きく、基礎病理と診断病理を完全に分け別々の教室とするグループと大講座化し一つの教室とするグループの 2 つに分けられる。しかし、これまで大講座化したものの多くは基礎の病理同士であり、臨床の診断病理をも巻き込んだ大講座化はほとんどない。我々の目指したものがスタンダードとして定着するかどうかは今後の我々の努力にかかっている。良い病理システムは、きっと良質な医学教育や医療の基盤になると信じている。

京都府立医科大学病理学教室

人体病理学 柳澤昭夫

細胞分子機能病理学 高松哲郎

分子病態病理学 伏木信次

計量診断病理学部門

当部門は病理学教室の「人体病理学部門」として人体病理・診断に関する臨床研究を行うとともに、大学附属病院の「病院病理部」として病理診断業務を全面的に行っている。「人体病理学部門」は 2003 年大学院大学化に伴い、病理学教室の一部門として「計量診断病理学部門」として発足し、2007 年により実態に即した「人体病理学部門」に改名された。「病院病理部」は 2003 年大学院大学化に伴い、土橋康成部長の後を引き継ぎ、初代教授兼病院病理部部长として柳澤昭夫が就任した。現在、人体病理学部門・病院病理部には教職員 5 名、医員 2 名、後期専攻医 2 名、大学院生 1 名、臨床検査技師 7 名が所属している。

部門の特徴

特徴は他の病理学教室と分担して院内や関連病院の病理解剖病理学の教育等を行う他、大学附属病院の病理診断業務を全面的に行うとともに、関連病院の病理医と連携し、主に関西圏の病理診断・医療に貢献していることである。2004年12月からは毎週月曜日に「京都外科病理検討会」を開催し、2007年7月には第100回を迎えた。この会は京都市立病院、京都第一赤十字病院、京都第二赤十字病院、府立与謝の海病院、大津市民病院、音羽病院などの病理医が参加し、自由に意見をのべ診断能力の向上に役立てている。検討した症例はこれまで2年間で約700例以上におよんでいる。

研究

研究は人体病理・診断に関連したことを中心に行っている。具体的には組織診断に有用な遺伝子解析（責任者 濱田）、乳癌組織型と化学療法効果（小西）、前立腺癌の組織異型と化学療法効果（浦崎）、臍液細胞診の早期診断（安川）等について臓器別に行っている。

病院病理部の日常業務

1990年病院病理部発足時は、組織診7,230件（うち術中迅速319件）、細胞診7,613件であったが、2006年には組織診8256件（うち術中迅速676件）、細胞診9,662件であった。受付件数としては組織診、細胞診1.2倍、術中迅速は2倍程度の増加であるが、ブロック数は1990年が組織診約20,000ブロック（うち術中迅速約500ブロック）に対して、2006年は組織診約67,306ブロック（うち術中迅速約9,412ブロック）におよび、医療の質の向上に伴い、1件当たりの標本作製数が飛躍的に増加していることが理解される。

2007年8月現在のスタッフ；教授：柳澤昭夫、講師：濱田新七、小西英一、眞崎 武（府立与謝の海病院臨床病理科医長併任）、助教：浦崎晃司、安川 覚、医員：安原裕美子、丹藤 創、大学院：樋野陽子、後期専攻医：中尾龍太、松井真紀子。

柳澤昭夫

細胞分子機能病理学部門

当部門は旧第二病理学教室で、2003年（平成15年）4月の大学院重点化に伴い、細胞分子機能病理学部門に変更となった。

1997年9月以降に部門に就任あるいは他へ異動した方、及び主な出来事は以下の通りである。1997年（平成9年）10月小山田ゆみ子助手就任。1998年（平成10年）4月小山田正人助教授に昇任。1999年（平成11年）1月安井寛助手就任。4月高松教授学生部長を兼任（2003年3月まで）。同月、

木谷（桂）奏助手ケンブリッジ大学へ長期出張（2000年12月まで）。5月、基礎医学学舎3階の仮教室から現在の7階に移転。11月に第24回レーザー顕微鏡研究会（京都府立医科大学）を主催。2000年（平成12年）5月に第14回細胞生物学シンポジウム（京都府立医科大学）を主催。11月小山田助教授日本病理学会学術研究賞（A演説）受賞（心臓におけるギャップ結合の役割と病態発生への関与）。2001年（平成13年）3月金子智行研究員青蓮賞受賞。4月木谷（桂）奏学内講師が松下記念病院へ異動。2002年（平成14年）4月横山慶一助手が松下記念病院へ異動。5月安井寛助手が京都市立病院へ異動。6月田中秀央学内講師就任。2003年（平成15年）8月小西英一学内講師就任。2004年（平成16年）4月戴平、原田義規助手就任。小西英一学内講師が病理部へ異動。11月に第13回バイオイメージング学会（京都府立医科大学）を主催。2005年（平成17年）4月小山田ゆみ子が明治鍼灸大学へ異動。8月田中秀央講師に昇任。10月に第46回日本組織細胞化学会総会・学術総会（国立京都国際会館）を主催。12月に第4回コネキシン研究会（ルビノ京都）を主催。2006年（平成18年）3月田邊卓爾大学院生青蓮賞受賞。2007年3月、高松教授、第96回日本病理学会総会（大阪）において、「不整脈源性基質を求めて－バイオフォトンクスを用いた心臓病理学－」の演題で宿題報告を行い、日本病理学賞受賞。9月井上香織日本組織細胞化学会論文賞受賞。

当部門で研究を行い、1997年9月以降に学位（博士）取得した方は、高橋章之、松下努、姚曉虹、倉田博之、増田淳司、長岡孝則、浜雄光、岡田晃一、鈴木敏弘、平川永徳、辻井英治、周武雄、田邊卓爾、井上香織、松波達也、浜本徹である。

参加した大型研究プロジェクトとしては、日本学術振興会・未来開拓事業「フォトンクス生体計測制御」プロジェクト（1997-2001）、科学技術振興事業団戦略的基礎研究（CREST）「非線形ナノフォトンクス」プロジェクト（2001-2006）、新エネルギー・産業技術総合開発機構「ナノ医療デバイス開発プロジェクト」（2004-2006）がある。

2007年9月1日現在部門の構成は、高松哲郎教授、小山田正人准教授、田中秀央講師、戴平助教、原田義規助教である。研究テーマは、1) 心臓における情報伝達異常の機能病理、2) ギャップ結合の構造と機能障害、3) コネキシンが関与するシグナル伝達機構、4) 蛍光・光学技術を用いた癌の超早期診断、5) 非線形ナノフォトンクスによる細胞制御である。

小山田・高松

分子病態病理学部門

1998年1月、附属脳・血管系老化研究センター開設以来、管理者教授のもと病態病理学部門助教授を務めていた伏木が教授に昇任し、助手2名（福山隆一、矢追 毅）をあわせて計3名の部門となった。その後、福山助手が講師に昇任、アルツハイマー病解明をめざす基礎的研究に尽力した。2001年11月に第29回臨床神経病理懇話会（京都府立医科大学）を主催。2002年8月には米国に転出した福山講師の後任として神戸大学医学部病理学教室より、神経病理学を専門とす

る伊東恭子講師を迎え、本学における神経病理学分野の教育・研究を担う体制が整った。2003年4月には大学院再編(重点化)により、大学院医学研究科分子病態病理学として歩みはじめた。併せて進められた講座再編により、病理学教室分子病態病理学部門を兼務することとなった。2003年4月に伊東講師が助教授に昇任。2005年4月に神経幹細胞の研究を米国にて進めてきた井村徹也が助手として着任、2006年10月から学内講師に昇任。なお、2002年4月から2006年3月まで伏木は本学研究部長を兼務、その間2003年4月以降2006年3月までリエゾンオフィス室長も兼務し、大学院重点化や中央研究室改革、産学公連携活動の推進に努めた。2007年4月から再度リエゾンオフィス室長を兼務している。

教育：病理学総論・各論の講義(実習を含む)全体の半分、病理セミナーを担当。この間には病理学を専攻する意思をもつ大学院生を1名受け入れ、大学院修了後の米国留学を経て、現在は病院病理部医員として柳澤教授のご指導のもと病理診断学の研鑽に努めている。当部門での研究により1998年以降に学位(博士)を取得された方は、呂寅幸、滋賀健介、平井清、小田良、中瀬泰然、木下周子、坂口博史、沈春参、山中巧、廣田隆一、太田好美、小橋裕明、堀江直行、中村恵子、丹藤創、柳田正志である。その中2編は学会優秀論文賞を授与された。2006年4月からプロジェクト研究員代 紅梅が研究に参画。

剖検：剖検は、毎週水曜日と金曜日を伊東・井村が担当、土曜日・祝日に関しては当番制にて担当。臨床との症例検討会を定期的で開催するとともに、希少症例に関しては、この間、英文症例報告を3編、臨床医との共著にて国際誌に発表した。また脳検(ブレイン・カッティング)を臨床医への卒後神経病理学教育の一環と位置づけ、オープンな場として活用を図っている。

研究：文部科学省科学研究費基盤研究(B)(C)、厚生労働省科学研究費、公的財団等からの研究助成を得て、内分泌かく乱化学物質の脳皮質形成・生後発達に及ぼす影響解析、細胞接着分子L1の脳形成異常における機能解析、低線量放射線の脳皮質形成に及ぼす影響解析、神経幹細胞の分化解析、ヒト脳神経系疾患の分子病態解析等に取り組んでいる。とりわけ放射線影響の研究と内分泌かく乱化学物質ビスフェノールAの研究は社会的に注目を集め、前者はNHKスペシャル『被爆者 命の記録』(2005年8月6日放映)にて、後者は日経エコロジー2007年9月号の特集記事にて紹介された。なお、2006年3月に伏木は第6回小児医学川野賞(基礎医学分野)を受賞した。

2007年9月現在のスタッフ：教授 伏木信次、准教授 伊東恭子、学内講師 井村徹也、助教 矢追 毅、辻本ユカ。

伏木信次

医動物学教室

2003 年（平成 15 年）4 月、京都府立医科大学医学部から京都府立医科大学大学院医学研究科へと組織変更され、講座名が医動物学教室から寄生病態学教室に変わった。大幅な教室名変更は好ましくないと考え、頭をひねって考えた新名称だが、医学科学生への科目名は医動物学のままであり、また英文名称は従来通り Medical Zoology を使用している。

教室の歴史

医動物学教室は、1948 年（昭和 23 年）に小林晴次郎先生が講師嘱託として本学に赴任されたことに始まる。小林先生は昭和 4 年から終戦に至るまで京城帝国大学微生物学第 2 講座の教授をされていた高名な学者で、京都府立医科大学赴任時には 64 歳であったため、講師嘱託であったという。今からすると不思議な立場で、教授会での投票権もあり学位も直接出されていた。昭和 34 年から昭和 45 年まで長花 操教授が在職されたが、この方は小林先生の京城帝国大学時代の助教授だった方である。その後、昭和 45 年に本学出身の吉田幸雄教授が就任された。吉田先生は小林先生の直弟子で、研究対象は原虫から蠕虫までを網羅し、基礎寄生虫学から臨床寄生虫学まで、全てに精通した文字通り日本を代表する寄生虫学者であり、現在もご活躍である。吉田先生執筆の「図説人体寄生虫学」は、名著としての誉れ高く現在最もよく利用されている寄生虫学教科書である。吉田先生退職後、平成元年に有菌が教授に就任し現在に至っている。

現在の教室の研究

2006 年に長い間準教授を務めた塩田恒三先生が退職し、現在の教室スタッフは有菌の他、（講師）山田 稔、（学内講師）内川隆一、手越達也、（技師）松浦百合絵である。過去 10 年間に、消化器内科から笹部先生、堀井先生、藤原先生、関川先生、山内先生等が大学院生として研究に来てくれ、現在は曾我先生が大学院生として研究している。研究生としては、耳鼻科の兵先生、扶桑薬品の西田先生などが学位を取得し、現在は内科の川井先生、獣医師の武田先生、橋本先生が研究に励んでいる。

現在、寄生虫感染によって誘導される免疫反応や病態の解析が教室における研究の中心テーマである。昨今、寄生虫学の領域では原虫研究が著しく進展し、例えば大阪大学微生物病研究所は寄生虫専門家として 2 名の教授を擁し、1 名はマラリアワクチン開発、もう 1 名はマラリア原虫の集団遺伝学を専門としている。一方、私達が対象とする寄生虫は蠕虫である。蠕虫感染系は原虫と較べてはるかに複雑であるが故に研究者の数も少数であるが、逆に無尽蔵の不思議さを秘め

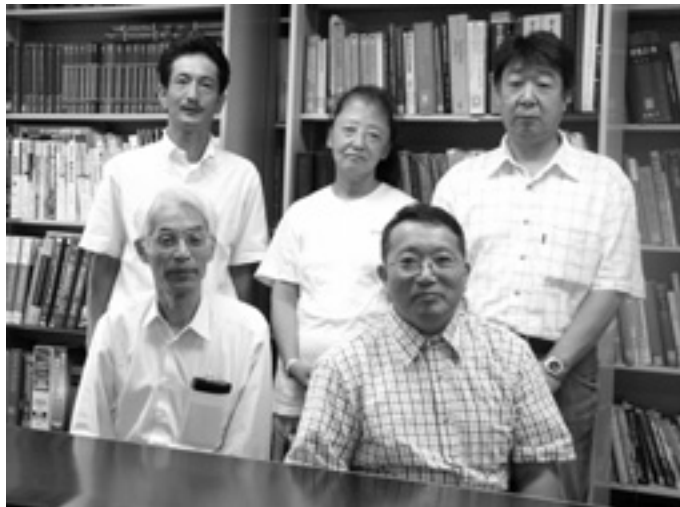
た領域でもあり、蠕虫の生物学や蠕虫感染に対する免疫反応を現在の分子生物学や分子免疫学に地道に翻訳していく先に、新発見が待ち受けていると確信している。

基礎的な研究とは別に、ヒトの寄生虫疾患にも興味がつきない。不思議なことに、近年食物を介する寄生虫症が増加している。例えば日本海裂頭条虫はサケから感染するが、当教室の塩基配列解析による研究から多系統に分類されることが分かり、感染源となるサケの種別と条虫の系統との関係を解析する必要に迫られている。この例が示すように、日本自身もまだまだ立派な寄生虫研究のフィールドである。

学会等

1997年10月3-4日、第53回寄生虫学会西日本支部、第52回衛生動物学会西日本支部大会主催（京都リサーチパーク）。2004年12月7-9日、Japan-United States Cooperative Medical Science Program Parasitic Diseases Panel 39th Annual Meeting 主催（国立京都国際会館）。2005年10月14-15日、第46回日本熱帯医学会主催（国立京都国際会館）。有菌は2002-2006年、World Federation of Parasitologists のセクレタリーを務め、2005年以降、日本寄生虫学会機関誌 *Parasitology International* の編集長。本誌への投稿は世界中からあり、2006年インパクトファクターは1.5と、もう一息。

有菌直樹



寄生病態学教室スタッフ（2007年9月）

微生物学教室

1998 年から 2007 年までの間の教室変遷について、研究と教育の 2 つの面について、述べてみる。

1 研究について

本教室では、細菌学、ウイルス学、免疫学の広範にわたる領域を担当しているが、研究グループも大体これに応じて分かれている。

細菌学の領域では、ここ約 10 年ほどは、喜多准教授を中心に、一部は消化器内科との共同で *H. pylori* に関する研究に取り組んできた。主に、*H. pylori* による病態形成にサイトカインがどのような役割をしているかの観点から、多くの成果を挙げてきている。

ウイルス学の領域では、研究者の変遷により、変わってきているが、市村助教授の手がけていた HIV に関する研究は、喜多准教授に引き継がれ、いくつかの成果を上げることができた。しかし、共同研究の相手であった、京都大学ウイルス研究所速水教授の退官に伴って、中断してしまった。中屋講師が就任してから、ウイルス感染と自然免疫に関する研究が行われた。また、京都府で高病原性トリインフルエンザの感染事件が起きたため、鳥インフルエンザウイルスの分離・同定に協力することとなり、これも研究テーマの一つに入るようになった。中屋講師が、大阪大学に転出した後は、扇谷助教に引き継がれ、現在、インフルエンザ感染に対する漢方薬の作用機構解明に取り組んでいる。

免疫学の領域では、主として分子生物学的な視点から松田准教授のグループが、精力的に研究を行っている。そのツールとしての、非ウイルス性ベクターの開発、効率の高い遺伝子導入法の確立、ナノテクノロジーを応用した新しい導入法の開発、それらの応用としての各種疾患（悪性腫瘍、心疾患、リウマチ性疾患、アレルギー性疾患など）の治療にも取り組んできた。

平位講師は、免疫系細胞の再生医学的研究に取り組んでいる、すなわち、幹細胞より好中球系の細胞分化の分子生物学的解明を試みている。

また、10 年ほど前より、今西のグループでは、補完・代替医療に興味を持ち、補完・代替医療の社会医学的調査研究、漢方薬やアロマセラピーの感染症治療への応用、アロマセラピーやマッサージ療法によるストレス軽減、リラクゼーション誘導、疲労回復、サーカディアンリズム障害からの回復と免疫系への影響などについて、研究を進めてきている。さらにこれらの応用としての統合医療（西洋医学とそれ以外のいわゆる補完・代替医療を組み合わせた医療）を、各地で実践し、その効果について、検証している。

2 教育について

微生物学の教育については、ここ 10 年で、講師と担当領域は変わりこそすれ、大きい変化はない。しかし、医学教育そのものの全国的あるいは全学的な改革が進められる中で、それに対応して、講義や実習の内容にも改良を加えてきたのは当然である。また、当教室では、研究配属にも力を注いでおり、当教室での研究配属を希望する学生は、つねに 2 桁である。研究配属を通して、基礎医学の研究に興味持ってくれた学生が多く出たことは、研究配属の所期の目的を達成しているのではないかと自負している。

教室の年表(1998 年から 2007 年まで)

1999 年	4 月	喜多正和講師、助教授（兼任）就任 平位秀世、助手就任
1999 年	5 月	市村 宏助教授、金沢大学医学部国際環境保健学講座教授に就任
	6 月	松田 修講師、助教授就任
2000 年	4 月	平位秀世助手、講師（学内）就任
2000 年	12 月	佐藤悦子、助手を退職し、アメリカに留学
2001 年	3 月	飯田陶子、助手を退職し、三重大学へ
2002 年	4 月	大学院大学化に伴い、科目名が感染免疫病態制御学となる 中屋 隆明、助手就任 栗山 洋子、助手就任
2003 年	7 月	微生物学教室開講 100 周年・今西二郎教授就任 20 周年
2004 年	1 月	中屋隆明助手、講師（学内）就任
2005 年	4 月	栗山洋子、助手退職し、博士研究員へ
2005 年	9 月	中屋隆明、大阪大学微生物病研究所助教授へ
2005 年	11 月	扇谷えり子、助手就任
2006 年	4 月	渡邊映理、助手就任
2006 年	9 月	岸田綱太郎名誉教授逝去
2007 年	2 月	菅沼 惇名誉教授逝去
2007 年	4 月	大学院の科目名が、感染免疫病態制御学から免疫・微生物学に変更 平位秀世、講師就任

薬理学教室

基礎校舎の貨物用エレベーター7階を降りるとすぐ薬理学教室の古色の標識が目に入る。歴代掲げられて来た金属製で、所々錆も出ている。新しい基礎校舎に移転した当初は金具周囲の錆隠しに枠を取り付ける予定であったが、いつのまにか見慣れてしまい、そのまま原型を保っている。

平成8年9月、栗山欣弥教授の後任として矢部千尋が国立小児病院小児医療研究センターより6代目の薬理学教室教授として着任、まもなく本学は125周年を迎えた。以降大学院医学研究科の再編に伴い、教室は15年4月より「病態分子薬理学」を標榜し、この135周年を迎える。教室の研究テーマは当初の糖尿病合併症の発症機構に関わるポリオール経路の解析から、新しい活性酸素産生酵素 NADPH オキシダーゼの病態分子薬理学に重心を移し、教室構成員も大きく変わった。

ポリオール経路はグルコースをソルビトールからフルクトースに変換する糖代謝の副路であり、糖尿病合併症の引きがねとなる。平成9年に着任した西中 徹（現・大阪大谷大学准教授）と同10年に教室員となった岩田和実（助教）はポリオール経路の律速酵素であるアルドース還元酵素の遺伝子発現調節機構と虚血再灌流障害における本経路の役割を遺伝子組み換えマウスを用いて解析し、一連の研究として発表した。この過程で活性酸素種がアルドース還元酵素の発現を誘導するシグナル分子であることが明らかとなり、現在の活性酸素産生酵素 NADPH オキシダーゼの研究へとつながった。平成11年に勝山真人（講師）が留学先の米国より着任し、大学院留学生の范 春元（現・四川大学華西医院教授）とプロジェクト研究員荒川憲昭（現・横浜市立大学助教）とともに NADPH オキシダーゼの新規アイソフォーム（Nox1）の遺伝子発現調節機構を明らかにした。平成15年には橋本恒一講師の北山病院への転出に伴い衣斐督和（助教）が転入し、Nox1の神経系での生理機能について研究を進めている。平成18年4月からは本学大学院博士課程を経た松野邦晴（助教）と笥朋子（プロジェクト研究員）が加わり、本教室で作出した Nox1 ノックアウトマウスの病態解析に取り組んでいる。

薬理学は基礎医学の中でも様々な病気の治療に必要な「薬」を扱うことから臨床医学に直結している。生化学・生理学・形態学など多彩な研究手法を駆使して病態病理を解析し、新しい薬物開発を目指す実学でもある。当教室の研究も有効な治療法が確立されていない領域の薬物開発を究極の目標としている。一方、最近全国で薬学部が相次ぎ新設され、大多数の薬学部は6年制へと移行した。医師・薬剤師の役割分担はどのように変貌していくのか。また欧米諸国では基礎医学教育が改編され、薬理学を含む複数の講座の統廃合が図られている。医学教育における薬理学

の存在意義、特に医科大学としての薬理学教育の今後のあり方も考えねばならない。本教室は明治 42 年（1909 年）に開講されまもなく 100 周年を迎える。本学の長い歴史と伝統を守りつつ、さらなる発展を目指すために何をなすべきか、その責務は重い。

矢部千尋



研究発表および取得研究費件数

年度	著書	総説	原著	国際学会	国内学会	科研費	他省庁財団	企業
平成 10			2	3	16	1	2	
11	2	1	3	2	13	3	1	1
12		1	3	4	14	3	1	1
13	1		4	4	16		1	
14	1	1	4	4	14	3		
15			2	1	12	5		
16			4	3	13	4		1
17			6	1	11	4		1
18			5	4	4	4		1
19						3		

保健・予防医学教室 予防医学部門

平成 8 年 7 月に、先代の川井啓市教授の後任として、当教室（当時の教室名は「公衆衛生学教室」）の教授に就任して以来、およそ 11 年の月日が経過しており、「最近 10 年の歩み」とは、まさに私が当教室の教授として就任しての歩みと大きく重なる。

大学院生時代から約四半世紀以上、この教室に籍を置き、一貫して癌の研究に携わってきたわけであるが、この 10 年前までの時期を種蒔きや萌芽の時期と考えると、この 10 年間は、まさに茎がしっかりとし、つぼみがふくらみ、一部には花も咲き始めた時期であったといえる。

この 10 年間に於いて、癌研究はいうまでもなく、臨床での癌治療や癌予防においても大いなる変化があった時期であり、それはここ最近注目されている「分子標的抗癌剤」の登場に代表されている。我々の研究室では、極めて早い時期から、癌における「癌遺伝子」及び「癌抑制遺伝子」の役割とその重要性に注目し、特に「p53-RB 経路」という発癌、あるいは発癌抑制の最も本質的な部分に重点をおいた研究を実施してきた。

また「癌」が遺伝子の異常により生じることが明らかになってきた際に、多くの研究者が、癌の原因を、遺伝子変異を始めとする「質的異常」と解釈したのに対し、我々は、我々が世界に先駆けて証明したメチル化による癌抑制遺伝子の不活性化に代表されるような「量的異常」と解釈し、そのような「量的異常」であれば、その「正常化」による癌治療は容易ではないかとの着想に至り、この戦略を「遺伝子調節化学療法」「遺伝子調節化学予防」と名付けて提唱した。

そしてその着想を具体化する為に、癌抑制に重要とされる「p53-RB 経路」に関与する様々な遺伝子を研究対象とし、時にはその遺伝子の発現調節領域の解析を行い、時にはその遺伝子の発現誘導物質の探索とその誘導機構の解析に取り組んできた。

その成果として、フラボノイドを始めとする食品成分・植物成分が、この「p53-RB 経路」において重要な役割を果たす遺伝子の発現を活性化し、その結果として「p53-RB 経路」の再活性化し、最終的には癌治療、癌予防への有効性を示すことが出来た。

また食品成分だけではなく、数多くの製薬企業と共同研究を実施し、この「p53-RB 経路」に特化したスクリーニング系を用いて化合物を探索することで、いくつかの抗癌剤候補物質を見出す

ことにも成功しており、これらの候補化合物の中から、近い将来、臨床的に使用される抗癌剤が登場することを期待している。

更に現在では、複数の食品成分や化合物を最適に組み合わせることによって、それぞれの癌のタイプに応じた「テーラーメイド癌治療」や「テーラーメイド癌予防」を目指した研究を実施しているが、「テーラーメイド医療」を行う際には、まずは適切な診断が前提、かつ最重要であることから、我々は診断機器企業と共同で、この「p53-RB 経路」に重点を置いた診断装置の作成にも成功した。

この 10 年間、特にここ数年間で、我々の提唱する「遺伝子調節化学療法」「遺伝子調節化学予防」の具体的な成功例が数多くで始めている。今後は、これらの成功例や、多くの企業との成果に基づき、より臨床的な「トランスレーショナル・リサーチ」を実施することで、より早く、そしてより優れた癌の治療法、癌の予防法を多くの人々に還元していく所存である。

研究内容の詳細等は、当研究室の web site を参考にして頂けたら幸いです。

web site : <http://www2.kpu-m.ac.jp/~pubmed/>

酒井敏行

保健・予防医学教室 公衆保健科学部門

附属脳・血管系老化研究センター（以下老化研究センター）社会医学・人文科学部門（以下社会医学部門）は、老化研究センターにおける社会医学系の研究部門として 1998 年 3 月 1 日に渡邊能行が教授として着任にすることによってその第一歩を踏み出した。

老化研究センターにおける社会医学系の研究部門の設置は、老化研究センター開設時よりの懸案事項であったが、1997 年度になって京都府より公衆衛生学教室の 3 人の定員を移すことで正式に設置が認められたものである。高齢化のますます進展する京都府において京都府民を対象にした疫学研究により、脳卒中や認知症等の老化と関連した疾病、すなわち生活習慣病の発生要因を明かにし、その成果を府民に還元することによって府民の健康の保持・増進に役立てること目的とした研究を行っている。同時に、“人文科学”という名称も付与されているように、医学的なアプローチだけでなく、人文科学的アプローチにより府民の社会的にも文化的にも健康で生活の質（QOL）の高い日々をおくれるような取り組みももう一つの研究の柱として位置づけている。

渡邊は元々本学公衆衛生学教室で疫学研究を行ってきており、共同研究者であった林恭平が学内講師として 1998 年 6 月に、小笹晃太郎が助教授として 1999 年 4 月にともに同じ本学公衆衛生学教室より移籍することによって研究体制も整った。当初一年ほどは一時的に取り壊しの遅れた旧基礎 2 号館の西側 1 階に教授室があっただけで、研究室は公衆衛生学教室に間借りするという変則的なスタートであった。基礎医学学舎の二期工事が完成した 1999 年 4 月に基礎医学学舎 2 階に研究室のスペースも確保され、人的だけでなく物理的にも本格的な研究体制が整った。そして、1999 年度には京都府下の一地域において脳卒中や認知症等の老化と関連した生活習慣病の発生要因に関する多要因コホート研究を開始した。すなわち、飲酒・喫煙習慣、食生活や運動習慣等のライフスタイル、生活の質（QOL）や生活活動度（ADL）等の調査を 4900 人に行い、そのうちの約 1850 人については血清カロテノイド類（ α カロテン、 β カロテン、 β クリプトキサンチン、ゼアキサンチン、リコピン、ルテイン）及びホモシステインの測定も行い、現在この集団の追跡調査を行っている。同時に、対象地域の一部において 65 歳以上の住民を対象にした認知症スクリーニングも平成 11 年度に実施した。なお、この研究は、「京都府寝たきりゼロ総合推進会議（会長：藤田哲也京都市立医科大学老名誉教授）」の中の事業として 1999 年 3 月 16 日の会議で位置づけられたものであり、1998 年度～2000 年度の老化研究センターにおけるテーマ研究（1998 年度：「脳卒中中の地理疫学研究」、1999 年度・2000 年度：「老年期痴呆および脳卒中中の要因解析のためのコホート〔老化コホート〕研究のベースライン調査、並びにコホート対象地域の特性を明かにするための地理疫学研究」、いずれも主任研究者：渡邊能行）の一環として老化研の神経内科部門や基礎医学部門と協力して行っている。

コホート研究における疾病の発生を把握するための一つの方法として疾病登録があり、京都府においては京都府医師会が京都府より委託を受け、脳卒中登録を 1989 年より実施しており、渡邊が 1998 年度より委員として、2000 年度よりは副委員長としてその一端を担い続けている。

2003 年 4 月より本学の大学院重点化がなされたのと同時に本部門は大学院においては医学研究科地域保健医療疫学を担当することとなった。加えて、医学部における社会医学系講座の再編がなされ、それまでの衛生学教室（教授以下 5 人）、公衆衛生学教室（教授以下 5 人）及び本部門（3 人）の体制から、大講座の保健・予防医学教室の中に予防医学教室（旧公衆衛生学教室：教授以下 5 人）と公衆保健科学部門（旧衛生学教室：助教授以下 2 人と老化研・社会医学部門：教授以下 5 人）に再編され、渡邊が公衆保健科学部門の教授を兼務することとなった。なお、旧衛生学教室の教授ポストは長年新設が課題であった第二生化学教室に該当するゲノム医科学教室の教授ポストに転用された。2003 年 4 月 1 日時点では旧衛生学教室に 5 人が在籍していたが、2004 年 9 月に園田精昭助教授が関西医科大学の教授として、2006 年 1 月に木村貴文助手が同じく関西医科大学の講師として、2006 年 4 月に嘉数直樹学内講師が島根医科大学助教授として転出し、現在では 2005 年 2 月に助教授に昇任した奥田司と助手の奥田恵子が在籍している。これに替わって 2006 年 5 月より三谷智子が助手として、また、定数外ポストのプロジェクト研究員として尾崎悦子が、2007 年 4 月より繁田正子が学内講師として老化研・社会医学部門に赴任した。

2006 年 4 月 1 日より渡邊が本学管理職の一つである研究部長に就任したが、2007 年 3 月 31 日に研究部長を辞し、京都府北部地域特に舞鶴市における医師不足に対応すべく 2007 年 4 月 1 日より本学医療センター人事として京都府保健福祉部地域保健医療監、中丹広域振興局健康福祉部長、中丹東保健所長を本務として赴任したが、これまでの大学における教授の職は引き続き兼務し、教授会メンバーとして、大学の職責も担当している。

本部門は本学における社会医学系の講座の一つとして、また実際に地域保健を研究対象とする唯一の講座として、本学医学部保健・予防医学の中の公衆保健科学における講義と実習を担当している。本学が地域医療を担当する優秀な臨床医や地域保険を担当する医師の育成を行うことが、京都府における地域医療の発展にとって重要なことであり、地域医療と表裏一体をなす地域保健の教育に力を注いでいる。実際に担当しているのは、疫学、健康管理学、医療情報学、地域保健、精神保健、老人保健、健康教育、感染症対策、癌対策等である。

今後は、現在実施している老化コホート研究や現在立ち上げつつあるゲノムコホート研究を中心に、本部門の研究を遂行・発展させていきたいと考えている。

渡邊能行

法医学教室

古村の退官後、平成 10 年(1998)1 月、東京都監察医務院部長 安原正博が第 4 代の本学法医学教室教授に着任した。安原は鹿児島大学医学部を卒業後(昭和 45 年)、同大学第三内科学の井形昭弘教授の下で神経内科学を学び、ウイーン大学神経研究所を経て東京都監察医務院にて法医学を研究した。安原は法医学教室の研究体制を、法医病理学の確立、アルコール・薬物医学研究の充実、医事法及び医学的生命倫理学の三点に置いた。(1)法医病理学研究：法医学教室の社会的任務として最も重要な司法解剖の充実を図った。司法解剖数は 1998 年から 2007 年の 10 年間で従来の 2 倍増に至り、年間平均約 85~90 体に達した。平成 10 年 1 月から平成 19 年 8 月までの法医解剖総数は約 900 体で、殺人事件、自殺、不慮の事故、突然死などが多く、これらの法医病理学的研究を通して、特に、法医神経病理学(forensic neuropathology)を確立した。安原は、第 16 回国際法科学会(Montpellier, 2002)ワークショップで講演“degenerative diseases in forensic neuropathology”を行い、第 6 回国際法医学シンポジウム(Hamburg, 2004)にも発表した。社会的関心の大きい解剖例には、「京都府立医科大学看護師殺人事件」、「宇治市、日野小中学校殺人事件」、「京都メル友連続殺人事件」、「人工呼吸器エタノール混入事件」、「長岡京児童虐待殺人事件」、「京都大学、脳死からの肺移植後死亡事件」、「介護殺人」などがあり、虐待(高齢者、児童)、医療関連死、情報化社会の中の新しい形態の殺人事件などが現代社会の社会病理であることが明らかになった。安原は医療関連死モデル事業の大阪地区第三者機関委員として参加している。教室は平成 10 年以來現在まで、東京都監察医、大阪府監察医として、東京都 23 区および大阪市において多数の検案・行政解剖に従事している。(2)実験的法医神経病理学：安原は科学技術振興事業団、戦略的基礎研究推進事業研究領域「脳を知る」、研究課題「アルツハイマー病における神経細胞死の研究」の共同研究員として、アルツハイマー病発症機序に関する β アミロイドカスケードの研究に参加した(平成 8 年~平成 12 年)。安原、佐久間らは法医学における筋損傷研究の一環として、骨格筋損傷モデルから骨格筋修復機序を免疫組織化学、Western-blot 法により研究し、筋再生における cardiotrophin-1、calcineurin、neuregulin-1 の役割、筋ジストロフィーマウスの発症機序などについて新知見を発表した。(3)アルコール・薬物医学研究：吉本、加藤らによりアルコール依存の神経薬理学的研究が進展した。吉本らはアルコール摂取時に脳報酬系の側坐核ドーパミン神経系機能亢進が正の強化として作用し、中脳辺縁系ドーパミン作動系がアルコール依存形成に重要であることを指摘し、食行動とアルコール摂取の関連を含めて第 12 回国際生物学的アルコール研究学会(2004)をはじめ多くの国際学会で発表した。加藤はモルフィン精神依存形成にグルタミン酸神経系が関与することを明らかにした。

安原は日本アルコール・薬物医学会の庶務委員長、理事として法医学教室に置かれた同学会事務局(担当：池田展世)を主宰し、第 41 回日本アルコール・薬物医学会総会会長(2006)として同学会を主催した。(4)医事法、医学生命倫理学：安原は関西医事法研究会の会長(平成 16 年～現在)として同研究会を運営し、医事法の研究活動を行なっている。関西医事法研究会は現在第 254 回に達し会員数約 200 名を数える。本研究会は医事法および医学的生命倫理学に関する研究会を隔月毎に開催し、医事法に関する活発な研究活動を続けている。同事務局は本法医学教室に置かれ、活動の一環として「医事法の方法と課題」(信山社出版、2004)を出版した。安原は平成 15 年 4 月より大学院医学研究科統合医学専攻にて「医学生命倫理学」、「事故、虐待予防システム学(特論)」を担当し、講義を行なっている。(5)事故、災害予防：反町、安原らは日本社会の特徴的な死亡状況である高齢者入浴死、CO 中毒死、自殺、孤独死について予防疫学的立場から研究した。安原は高齢者虐待防止研究会に属し「高齢者虐待に挑む 一発見、介入、予防の視点一」(中央法規出版、2006 年)を共著、出版した。

安原正博

1998～2007 年の在職者：教授：安原正博、准教授：吉本寛司、藤宮龍也、講師：反町吉秀、学内講師：佐久間邦弘、助教：加藤英明、稲島修一郎、大洞弓子、上村公一、技官：垣内一男、大学院生：李 裕江、金田成浩、西川順治、平田美幸、坂部昌明、研究生：佐治博夫、堀 雅文、加藤 麦、福田文彦、アルコール・薬物医学会事務局：池田展世、学位取得者：李 裕江、西川順治、平田美幸

- 平成 11 年 11 月 : 第 46 回日本法医学会近畿地方会会長(安原正博)
- 平成 13 年 4 月 : 助教授(法医学) 藤宮龍也が山口大学医学部法医学教授に就任
- 平成 15 年 4 月 : 教授(法医学) 安原正博が京都府立医科大学大学院医学研究科、地域医療社会医学分野法医学教授任命
- 平成 16 年 1 月 : 講師(法医学) 吉本寛司が助教授に昇任
- 平成 16 年 11 月 : 第 32 回臨床神経病理懇話会会長、世話人代表(安原正博)
- 平成 17 年 4 月 : 安原正博、附属図書館長任命(平成 19 年 3 月まで)
- 平成 17 年 11 月 : 第 35 回日本医事法研究会大会会長(安原正博)
- 平成 18 年 7 月 : 第 41 回日本アルコール・薬物医学会総会会長(安原正博)